広告　企画・制作　LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

伝統工芸・木曽漆器の新たな挑戦

岩原 裕右　長野県／木曽漆器職人

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」（主催：レクサス）は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援

プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、隈研吾氏（建築家／東京大学教授）、グエナエル・ニコラ氏（デザイナー）、清川あさみ氏（アーティスト）、生駒芳子氏（ファッション・ジャーナリスト／アート・プロデューサー）、下川一哉氏（意と匠研究所）らをサポートメンバーに発足。第一回となる今回は、全国47都道府県から地域推薦、一般公募合わせて52名の若き匠が選出された。

昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを重ね、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトづくりに取り組んだ。「本当に欲しくなるプロダクトか？」「地域のオリジナリティーはあるか？」「コンセプトやターゲットは明確か？」など、サポートメンバーから真剣なアドバイスが行われ、匠は約一年の試行錯誤を経てプロダクトを完成させた。

1月18日に都内で行われたイベントでは全国の百貨店、セレクトショップのバイヤー、メディア、デザイン関係者などに向けてプレゼンテーションを実施。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなるチャンスを手にした。

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。日本のモノづくりを支え発展させ、そこから新しい価値を生み出そうとしているレクサスのブランド思想の1つである「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。長野県選出の匠、木曽漆器職人・岩原裕右さんの思いと、完成したプロダクトを紹介する。

1月18日、プレゼンテーションにて

緊張の面持ちでのプレゼンテーション

スーパーバイザー
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科卒。「料理の鉄人」や「ニューデザインパラダイス」、映画「おくりびと」など数多くのヒット作品の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。

かつてない漆塗りのものづくりを

岩原さんが生まれ育ち、なりわいを営む塩尻市木曽平沢は、伝統的工芸品「木曽漆器」の本場だ。標高900メートルの冷涼な気候、木曽谷の豊かな森林が生み出す良材、かつて主要街道だった旧中山道沿いという立地―。そうした条件が重なり、木曽漆器は地域の産業として発展。職人の技術が成熟し、受け継がれている。

岩原さんの父は一級漆器技能士で、伝統工芸士。一流の職人の技術を幼いころから身近に見てきた。その父に師事したのは、自然な流れだった。

木曽漆器の主な製品である食器や家具は、ライフスタイルの変化に伴い昔ほど大きな需要はない。この文化を守るために、漆器職人の新たな挑戦が求められている。

岩原さんはそんな時代に真正面から向き合う職人だ。伝統工芸品としての魅力を生かしつつ、現代の人々に受け入れられるものができないか―。2014年、独自のブランド「jaCHRO（じゃっくろ）」を立ち上げ、その課題に取り組む。

コンセプトは「かつてない漆塗り製品」。レザー財布、シルバーリングといった、それまで漆とは親和性がなかったものに漆塗りを施す。岩原さん自身が日常的に使いたいものを選び、木曽漆器の良さを身近に感じてもらえるように、と思いを込める。

今回のプロジェクトも、木曽漆器をアピールする絶好の機会と考えて臨んだが、サポートメンバーから思いも寄らぬ提案があった。

「漆を塗った名刺を作ってみてはどうか」

キックオフ・セッション

エリア・コンサルティング

確かに名刺は、初対面の人に自分を印象付ける大切なツールだ。漆塗りの名刺なら、渡す相手に与えるインパクトは間違いなく大きい。

しかし、そう簡単にできるものではない、とまず不安がよぎった。何しろ、薄い素材に漆を塗ることなど考えたこともなかった。だが、難しい課題ほどやりがいは大きいはず…。

ここから岩原さんの新たな挑戦が始まった。

レクサス松本での展示会

伝統技術にこだわって試行錯誤

名刺のベースとなる素材には、紙では実現できない素材感、重厚感を出すことができ、漆との相性が良い点で、あえて木を選んだ。ただ、あまり厚い名刺では使いにくく、もらった相手が困るようでは意味がないので、スギの板を極限まで薄く削った。

漆塗りでは「木曽堆朱（ついしゅ）」「塗分呂色塗（ぬりわけろいろぬり）」といった地元の伝統技術にこだわった。初めての試みは、苦難の連続だった。漆の厚さで板が曲がってしまったり、乾燥させる時間が短いと文字がうまく彫れなかったり。理想的な仕上がりにするため、試行錯誤を重ねた。

昼間は通常の仕事があるため、試作は夜しかできない。時には睡眠時間を削って取り組んだ。そして数カ月、ようやく満足のいく名刺が完成した。

限られた時間の中での作業は大変だったが、伝統の技術をもとに新しいモノづくりに挑戦した時間はとても貴重で有意義だった、と岩原さんは今、感じている。この名刺がビジネスの場でもプライベートの時間でも、人々の様々な出会いの場で生かされることを願いつつ、この技術でレターセットや招待状などの商品化ができないか、模索を始めている。

作業風景

バイヤーと商談中

漆塗り名刺の製作もさることながら、それを大勢の人の前でプレゼンテーションしたことも、岩原さんにとっては初めての、そして有意義な経験だった。職人として、良い製品を作り出すだけでなく、その製品を多くの人に知ってもらうために製作者自身が語る必要性を強く感じたからだ。

木曽漆器、ひいては木曽地域全体が国内外から注目されるようになるといい。そう思って挑んだ今回のプロジェクトだった。

「ここまでできたのは、多くの方々に支えてもらったおかげです。特にレクサスの地元販売店の方には、自分の作品を店内に展示してもらったり、時々連絡をくれて励ましてもらったりと、最初から応援してくれました。本当に感謝しています。」

晴れ晴れとした表情で、岩原さんは話した。

完成した「漆塗り名刺」

岩原 裕右（いわはら・ゆうすけ）
長野県／木曽漆器職人

1978年長野県木曽郡楢川村平沢（現塩尻市木曽平沢）生まれ。彫金、革細工、溶接工の経験を経て、2008年一級漆器技能士であり伝統工芸士の父に師事。2012年未空うるし工芸を立ち上げる。2014年独自のブランド「jaCHRO（じゃっくろ）」を立ち上げ、かつてない漆塗製品作りに取り組んでいる。

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT